

網野善彦 [YM1]

『 無縁・公界・楽 日本中世の自由と平和 』

著者紹介
網野善彦

出発点

「自由」「平和」 [YM2]、本著で言われる「無縁」はどのように人民生活に影響を及ぼし、いかに「再生」されていったのか。

1、「エンガチョ」

「エンガチョ」の「エン」とは、穢と縁という二つの意味が存在している。

→「エンキーった」とは「縁切り」の魔力を持つまじないである。そして、縁切りとはこれらは「縁」と無関係なもの、「縁」を拒否した者の強さと明るさ、生命力そのもの示している。

2、江戸時代の縁切寺

縁切寺とは

離婚を堅く決意した女性にとってのもっとも有効的な離婚の手段は縁切寺への駆け込みであり、東慶寺、満徳寺は縁切寺として存在していた [YM3]。しかし、これに対して権力は深い色を示しており、東慶寺、満徳寺のみ幕府公認の縁切寺として存在していた。寛保以降、縁切寺の役割が変化するにつれ、離婚の「仰府」から「説得」へと変化していく中で、幕府はむしろ制度を支持するようになっていった [YM4]。天保のころには「内政」成立のための原理が発動され、妻の「自由」をひそかに保証していた縁起理の場は姿を消していった。

⇒アジールの一形態として、どのような原理に支えられていたのか、どのような場所が原理を担う場所となりえたかを追及する手掛かりとなる。

~~縁切の「原理」を持つ場の特徴：多くの尼寺が縁切寺の機能を持っていたことから、女性の性になにか関係があるのではないか。~~

~~寺自体が持つ特徴：広方祈願所とも言うべき場所が縁切寺となっていた。~~

寺の女性のなかにも階層があり、平等ではなかったことから、「自由」であった一方、「牢獄」の様な一面も持ち合わせていた。しかし、そのような場所こそが裏打ちされた自由の場であり、常識が影を落とす場所で「自由」が生きていた事は、そこから様々な文化が生まれていることから正当化出来る。

そして、離婚の縁切だけではなく、罪人と世俗との縁切という機能も存在していた[YM5]ことから、圧政に苦しむ農民にとっても同様な場所が存在したのではないか。

3、若狭の駆込寺一万徳寺の寺法

万徳寺

武田氏が、この寺に入れば罪を犯した者も保護されることを公認し、保証している。これらはこの寺が「無縁所」であった事に、その根源にある。無縁の原理が寺法として記されることによって、武田家の支配下に置かれることになったが、それまでの原理をしっかりと刻み込んでいる点で、「無縁」の原理の根深い力を読み取ることが出来る。

⇒戦国時代までさかのぼると、無縁の原理は江戸時代よりもはるかに強力であった。

注意すべき点

広義の意味での「芸能[YM6]」に携わる人々に支えられていた。

若狭土着の国人たちは一・二宮を精神的中心とし、一揆を結び幕府に対抗していた[YM7]。

4、周防の「無縁所」

禅昌寺が「無縁所」でありえた意味は、田畠の寄付を受け付けていないという事であり、一つには托鉢乞食に支えられていたという事であった。そして、托鉢乞食は「芸能」民であることから、「芸能」民も無縁と深い関係にある事が分かる。また、外部から借銭、借米を追及することも禁止されており、これらは「無縁所」の一般的な特性と見ることが出来る。一方で、「無縁所」が戦国大名によって封じ込まれ、悲惨な一面を持っている事も事実であったが、下人や科人たちが、解放を求めて「無縁所」に走入ったという事実は決して消えない。

5、京の「無縁所」

阿弥陀寺は市場であり、墓場である、「無縁所」であった。三好長慶の禁制を与えられており、そのなかでは国質[YM8]や所質[YM9]、喧嘩口論、押買が禁止されており、世俗の債権債務、争いから縁の切れた存在であった事が分かる。そしてこれらの「無縁」の原理こそ、市場の平和を支えていた。阿弥陀寺の経王堂では万部経^{まんぶきょう}[YM10]会が行われており、ここでも「芸能」とのつながりを読み解くことができる。また、大名の権力に依存し、その支配組織を利用する勧進方式が行われるようになったことが、無縁の原理の衰退につながった事は明らかであるが、勧進上人と無縁との関わりがあった事は注目すべき点である。幕府に承認され、市場と墓所と阿弥陀寺を結んだような清玉上人の様な勧進聖がいた一方で、物乞いに落ちたみじめな勧進聖もいたことから、「無縁」の人々において暗い面が存在した事は忘れてはいけない事実として存在している。

6、無縁所と氏寺

今川氏の国分、駿河、遠江には多くの「無縁所」が存在しており、無縁所と共通する特質を兼ね備えていた。今川家や徳川家・織田家は無縁寺と一般の寺を「私所」として区別していた。しかし、下総では「私所」に当たる寺は「氏寺」、「無縁所」に当たる寺は「公界寺」と呼ばれ、「公界寺」は一族の縁につながる氏寺とは明らかに区別され、無縁所と同じ本質を持つ者として存在していた。そして、公界寺の僧は能を持つ必要があると強調されている[YM11]点から、無縁の世界・公界の世界に通用するのが、「芸能」であることが分かる。

→無縁所が公界寺と呼ばれる事が確認できたが、これらは同義であるのか、「縁切」の原理を示す言葉であったのか[YM12]。

7、公界所と公界者

苦界所であった相模の江嶋の人々は主を持つことを許されず、それゆえに無縁であり、「平和領域」でありえた。そして同時に江嶋は、阿弥陀寺と同様に市場でもあった[YM13]。中国・吸収の大内氏において、家人としての縁を切られたものの事を「公界往来人」と呼んでおり、主従の縁を切られたものを指しており、「無縁」の人々と同じ意味を持つ。また、公界往来人において、公界に放り出されること自体が厳しい罰であり、悲惨な境涯^{きょうがい}への転落を意味していたことから、無縁と同様の意味を持っていると言える。ただ、このような公界にいる人々は、「芸能」民・「職人」として自立しており、自信と誇りを失っていなかった。戦国時代においては、「芸能」民は公界者、公界衆と呼ばれ、ここにも無縁と芸能の関わりを見ることが出来る[YM14]。

室町・戦国時代の互いに争う大名の中に多く見出される禅僧は、まさしく公界人であり、それゆえに「平和」の使者でありえた。戦国時代以降には大名の警戒心が強くなり、「無縁」の場が狭められ行くにつれて、「自由」な活動の場も狭められていくが、戦国時代においては社会の様々な場所において「公界」が存在し、活動が行われていた。

8、自治都市

南伊勢の大湊の自治組織である「老若」は「公界」であった。また、こうした自治都市こそ、公界所、公界者が集住する場所であった。後に信長の加護のしたで「自由」と「平和」を保つ方向へと進んだ境も、もとは公界所であり、信長の支配下以降も公界としての本質を保っていた。博多においても秀吉あるいは大名の家臣が家を持つことを禁じていたことなどから、「公界」の場であった事が分かる。また、取引、通行の自由からも裏付けられる。長崎においても頭人と呼ばれる自治組織によって組織され、走入りなども認められていたことから、公界のとして会ったことが分かる。

→中世都市の「自治」、その「自由」と「平和」を支えたのは、「無縁」「公界」の原理であ

り、「公界者」の精神であった事が断言できる。

9、一揆と惣

「老若」＝「公界」という等式は一揆においても成立し、一揆は「無縁」の場であった事が分かる。一揆は領主たちによる下人・所従と百姓に対する支配のための組織であり、成員相互の間に強弱・大小の差があったものの、「無縁」「公界」の原理に支えられ、一時的にでも自己を貫徹する原理が存在していた。

「老若」とは本質的に異様な秩序原理であった。有私を知らず、私的奴隷によって侵略されることもない、「無縁」と「公界」と並び、日本の人民生活に大きな影響を及ぼしている。そしてこの二つが支配の完成の大きな障害となっていた。その点から、一向一揆においても「無縁」「公界」の原理が貫徹している事は間違いない。

10、^{じゅうらく}十楽の津と楽市楽座

伊勢・志摩の海辺の「十楽の津」、桑名では、戦国大名とは本質的に異なる法理、自己主張を貫かれていた点から、これこそ「無縁」「公界」の原理が根源にあるのであり、桑名の合衆は「老若」「公界」そのものであった。ここにおいて、桑名が供御人[YM15]の末裔であった、上儀を承引せずと言われている点から、「うえなし」という主張は「公界衆」の論理と切り離しがたい関係にあり、戦国大名が「上」になることを頑強に拒否しつづけていることに表れているとも考えられる。この事実のみでは「十楽」＝「公界」であるとはんだんすることは出来ないが、加納[YM16]の地にあった楽市場においては借銭、借米など迫及されず、下人などが走入ったとしても主がこれに「異乱」してはならないと定められていることから、「無縁」「公界」の原理と同一の原理が「楽」にも存在していることが分かる。

11、無縁・公界・楽

無縁・公界・楽の根本的な特徴は主従関係、親族関係等の縁から切り離されている点。それに加えて、

- 1)不入権
- 2)^{じし}地子[YM17]・諸役免除
- 3)自由通行権の保証
- 4)平和領域、「平和」な集団
- 5)私的奴隷からの「解放」
- 6)^{たいしやく}貸借関係の消滅
- 7)連坐制[YM18]の否定
- 8)老若の組織

これだけ見れば理想郷の様な場所であるが、枠にはめられ、体制から排除され、餓死・野たれ死と背中合わせの現実であった。

そして、「無縁」「公界」「楽」が日本の民衆生活そのものから湧き出る自由・平和・平等へ

の理想への希求を表現する言葉となりえた、という事実から真の意味での仏教の大衆化、日本化の一端を見ることが出来る。

↓「無縁」の原理と源泉を、中世前期—南北朝期から鎌倉期までさかのぼって追及する。

12、山林

戦国時代、「山林に入る」とは駆け込み寺に入る事を意味し、中世期、さらには古代末期には山林そのものがアジール[YM19]、無縁の場としての性格を持ち、寺院が駆け込み寺としての機能を持つ源泉となったと考えられる。同様の性格を持つものとして、河・海があげられる。浦・浜への漂流物が「無縁」のものであり仏神のものとして意味を持っていたことから、河海の「無縁」の場としての特質がうかがえる。

13、市と宿

市の「無縁」としての特徴も、戦国時代より遡る事が出来る。ただ、中世前期は戦国時代にくらべ、明確ではなく、神仏と結びつけられた呪術的な色合いが強い。また、寺院の門前に市が開かれた事からも、寺院も門前が神仏の支配する「無主」の場であり、「無縁」の原理を潜在させた場所であった。そのため、ここには市が立ち、「無縁」、「芸能」の民が往来することとなったのだ。また、「芸能」の民が営んでいた「場」「庭」などの独特の場も市と同じ性格を持っていたことから、非人の「宿」、宿駅しゆくえきの「宿」なども同様の性格を持っていた事が考えられる。宿駅の「宿」は「芸能」の民、「無縁」の人々が往来する場であった、非人たちは有縁に差別されながらも、それに拮抗していた事実からも、非人の「宿」、宿駅しゆくえきの「宿」が「無縁」の場であった事が分かる[YM20]。

14、墓所と禅律僧・時衆

非人が葬式に関わっていた、山林こそが墓所とされ「無縁」の場としての性格を一層明らかにしていた、死体の集積所となる河原の近くに宿が建てられた事から、「穢」と「無縁」の場、「無縁」と何らかの関係があった事が分かる。また、非人を媒介として、律僧と葬式が深く結びついていた、無縁所に禅宗院が多いという事実から、合わせて「禅律僧」としばしば呼ばれるようになった。同じく葬式に深く結び付いていた時衆も「無縁」の原理を身に付けた人々であり、平和の使者としての特性を身につけていた。これらの、無縁の「禅律僧」と「時衆」が社会から差別を受けていたことも事実であるが、天皇を始め、貴族の一部から深い崇拝を受けていたのも事実である。この様に「無縁」であるがゆえに政治に口入りすることが出来るほど、広範かつ活発に活動していた。

15、関渡津泊、橋と勸進上人

有縁の人々から喜捨を得る上人の勸進[YM21]行為は、無縁でなければ行えない行為であった。こうした勸進により、上人達は寺院を建立し、仏像・経筒きょうづつを作りなどするほか、橋をかけ、道路をひらき、船津をつくり、泊をも修造しゆぞうしている。勸進上人が修造する築造物は「無縁」

の場でなければならず、寺院も含め本質的に「無縁」であった事がわかる。鎌倉期以降、勸進方法が様々な方法で体制化されていったが、これは本質的な勸進のやり方からみれば「墮落」ともとらえられ、勸進聖が物乞い[YM22]に落ちていく傾向が出てきてしまった。鎌倉期以降、「無縁」の原理は活発に精力的であり、権力から忌避、抑圧されながら、それらに接近し、深いかかわりを持っていた。

16、倉庫、金融と聖

蔵方からの借金は「無縁」の場からの貸金であるとされた事から、主従関係は切られるべきなのであり、蔵方そのものが「無縁」の場であったという事実を導き出すことが出来る。そして、倉庫、金融の行為が「無縁」の場、「無縁」の人々と不可分の関係にあった事が予想される。また貴重な宝物、文書等の保管が上人によって行われており、それらの行為は「無縁」の上人にして初めてなりえた行為であったと考えられる。実際、倉庫は「無縁」であるからこそ、平和であり、貴重なものを置く事が出来たと考えられる。そして、この「倉庫」を管理することが金融活動を行うのも自然の成り行きであった。さらに「無縁」の人々は、「有徳」と呼ばれるようになり、それゆえに荘園・公領を出来るだけ平和にするべき代官[YM23]となりえた。このように「無縁」であるが故、政界と通じ、私有財産を保障されるようになっていった事は、「無縁」の原理の衰弱、墮落である。そしてこの背景には、「無縁」「無主」の原理によって初めて私的財産の世界が成り立ち、それを媒介として発展していくという矛盾が存在している。

17、遍歴する「職人」

農業と非農業は分化しておらず、遍歴・行商[YM24]が「職人」が生計を立てるのに必要な事であり、「芸能民」も多く遍歴生活を送っていた。そして、自由な遍歴とともに重要な特徴となってくるのが、課役免除であり、年貢・公事を免除されていた。また、職人の組織が「坐」そのものであり、「老若」における座的構造を持っていた。

18、女性の無縁性

「職人」には女性が多く、無縁の場にも多くの女性を見ることが出来る。このことから、多くの女性が「無縁」であることは、女性そのものに無縁的な特質があった事が考えられる。荘園・公領などに比べ、「無縁」の場において中世の自治都市における女性の役割が重かった事、「職人」や借上・土倉に女性が多かった事はこれを裏付けることとなる。そして、女性の無縁性は、女性の「性」そのものの特質によるものであり、女性の「性」の持つ「平和」と「自由」との深い結びつきが隠されているのである。

19、寺社と「不入」

無縁・公界・楽の場の特質は、そこが「不入」の場である事であったが、それについても

時代をさかのぼることが出来る。鎌倉期以降、寺院の方から協力を主張されるようになった法理[YM25]を容認させる力は、当時の「一般社会」になお強力な作用を及ぼしていた「無縁」の原理そのものであったと言える。ただこの時期の「無縁」とは「有縁」と対立するよりも、「貧道」と結び付けられ、何らかの経済得的基盤を求め、それに対する侵害を排除するための根拠として主張される事が多い。また、鎌倉時代においても戦国時代同様、「無縁」の場が支配権の保護の下にいた。

現在までの通説によれば、自由都市などは存在せず、すべては封建的都市であり、「公」なるもの、「自由」と言われるものが幻想であるという立場が取られてきた。しかし、同じ「公」でも「公界」において「公権力」にならなかった事実からも見直されなければならない。

20、「アジール」としての家

中世時代において、鎌倉時代中期においても、家はアジールの場であり、「無縁」の場であった。西洋においても家は、アジールの場であり、平和領域であった。このことから「無縁」の場としての家の特性は世界の諸民族に共通した、人類史的な特質であるとも言える。それとともに、原始時代までつながる本源的な「無縁」性を潜在させていることを前提とすると、そこが領主の私的な奴隷化に対する抵抗の宣言になったことも予想できる。そして、家を「無縁」の場として考えると、無縁・無主と有縁・有主の原理が背中合わせにされるという事実そのものに根差しているという事が出来る。家とは「私的所有の原点」であり、それとともに、この事実そのものが「無縁」「無主」という原理に支えられているということである。

21、「自由」な平民

承久の乱[YM26]に見られたような、百姓たちの抵抗に、長く強靱な生命力をもつ「原始の自由」の現存、「自由民」としての特質を見出しうるのではないか。百姓たちの中には私的奴隷化から「無縁」であろうとする志向が受け継がれているのではないか。中世成立期をさらにさかのぼれば平民の「自由」はさらに生き生きと存在していた。そしてそこに作用していた「無縁」の原理は古代を超えて、未開・原始の社会までつながっていく。そしてここでも、自由と奴隷は背中合わせになって存在していた。そしてこの二つのバランスにより、多様な存在形態がとられることとなった。

22、未開社会のアジール

平泉澄氏[YM27]においては、日本のアジールの存在を否定しているが、「無縁」「公界」「楽」の原理まで目を向けてみると、律令化でも「無縁」が存在したと考えられる。また、現存するもっとも未開な民族のアジールと比べてみても、ほとんど全く同じと言っていいほど共通点が多い。そのことから、古代のアジールも完全に中世の「無縁」の場と共通していると言える。そして、中世に広く強力に存在しているアジールが、古代日本に存在していることも自然に予想できる。

24、人類と「無縁」の原理

「無縁」の原理は、未開、文明を問わず、すべての諸民族に存在してきた。アジールは「無縁」の一体系にしかすぎず、「無縁」は様々な形で人民生活に根付いている。

無縁の原理の作用の段階

- 1、未分類の段階：「無縁」「無主」、「有縁」「有主」も未分類である、「原無縁」な状態。
- 2、「原無縁」から区別された「無縁」：無縁と対立しつつも、それに支えられる「有縁」の原理が成立する。「無縁」の活発化による国家の形成と、それによる「原無縁」の衰退。実利的なアジールの登場とともに、「無縁」「公界」「楽」という明確に自覚された原理へ。
- 3、アジールの「終末」の段階：アジールは消滅寸前の状況であるが、「無縁」は滅びない。

「無縁」「公界」「楽」の場は理想郷への思考を示しており、人々の魂を揺るがす文化を生み出してきた。この原理は強靱であり、「有主」の世界を克服しつつ、吸収し、瀕死の状況におかれながらも、また芽吹きをみせるのである。

書評

赤坂憲雄[YM28]氏

「リトマス試験紙としての『無縁・公界・楽』」

「網野さんは百姓イコール農民で半ないと力説し、天皇と非農業民のかかわりや、列島の西と東の文化的な落差などについて、さまざまな新しい解釈を「常識破り」の身振りと共に語ってみせたが、じつはそんなことはみな歴史学界の「常識」であり、ただそれを正面切ってはじめて論じたのが網野さんであっただけのことだ」